

2022 年度自己点検・評価報告書

2023.6.15
白百合女子大学
自己点検・評価委員会

1. 2022 年度の自己点検・評価方法について

本学は 2019 年度から、PDCA サイクルを運用した質保証に資する自己点検・評価とするため、以下の方法により自己点検・評価を行うこととしている。

- ・ 大学基準協会の大学基準に基づいて、自己点検・評価を行う。ただし、点検・評価を行う基準について、重点基準については毎年行い、これに該当しない基準については評価年度を定めて行うこととしている。点検時には、大学基準協会の第 3 期認証評価用「点検・評価の視点」を使用する。
- ・ 点検対象となる教育プログラムを主に運営する各教育研究組織（学部・学科、全学教養教育部門、附属施設、教育・研究支援センター）および事務組織にて、「組織別点検・評価報告シート（以下、シート B）」の作成を通して各基準について点検作業を行う。作成されたシート B を自己点検・評価委員が確認・評価し、「点検担当（分科会）報告書（以下、シート C）」を作成する。シート B およびシート C を通して、大学全体の評価点・課題等を検討し、自己点検・評価報告書を自己点検・評価委員会で作成する。
- ・ 自己点検評価報告書を作成する上記の過程で得られた大学の課題や改善に関する提案は、内部質保証委員会へ報告され、内部質保証委員会の質保証に関する検討に役立てている。

2022 年度は、「基準 2 内部質保証」、「基準 4 教育課程・学習成果」、「基準 5 学生の受け入れ」「基準 7 学生支援」「基準 9 社会連携・社会貢献」について自己点検・評価を行った。なお、大学基準とは別に附属施設、教育・研究支援センターについては、事前に作成された計画に基づいて点検・評価を行った。

また、学長ビジョンや各種方針に基づく各組織での年次計画策定および計画履行状況等の点検作業について、2020 年度から正式に「組織別活動方針・目標シート（以下、シート A）」の作成・提出を求める取り組みを始めた。提出されたシート A について自己点検・評価委員会で内容確認を行った。

自己点検・評価結果に基づいて、改善が必要な事項については書類にまとめ内部質保証委員会へ報告を行った。

2. 自己点検・評価の担当およびスケジュールについて

自己点検・評価委員会で設定した「2022 年度自己点検・評価スケジュール」および「2022 年度自己点検・評価担当分担」に基づき実施した。

昨年度同様、各シート B を確認・評価する自己点検・評価委員会内点検担当は、確認対象となる教育プログラムに直接携わっていない委員が担当となるよう、可能な限り客観性を担保した。

3. 点検・評価結果について

【基準2 内部質保証】

(評価)

昨年度と比較し、自己評価・委員会評価ともに「改善すべき点がある」との評価が減少した。2022 年 4 月に内部質保証の方針を定め、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針、学生の受け入れ方針の 3 つを明記するなど内部質保証のための手続き、体制が整備されていると評価できる。

(取り組んでいる点)

- ◎ 規程等を通じて、推進組織、学内体制、推進組織構成メンバーが明らかにされており、体制が整備されていると判断できる。
- ◎ 本学の 3 つのポリシーが有効に機能するためのアセスメント・ポリシーの策定に向けて、学修成果の定量的指標を導入できたことや、学部・研究科その他の組織において点検・評価を毎年実施するシステムが確立している点が評価できる。

(課題)

- ◎ 内部質保証の方針や学内体制の整備はできているが、システムを実施することが十分とは言えない。2022 年度から点検・評価について数値に基づく検証の比重を高める方針が示されているが、アセスメントテストの導入のみでなく、理念や教育目標に照らし合わせて達成度を測定する必要がある。
- ◎ 全学で教育の質を向上するための取り組みが進んできていると判断できるが、実施したアンケートやアセスメントテストを教育の質向上へと還元できる仕組みや体制作りが必要である。

【基準4 教育課程・学習成果】

(1) 学部

(評価)

自己評価、委員会評価ともに、「適切に取り組んでいる」との評価が多数だった。組織によっては「教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか」、についても昨年度に比べ改善している。

(取り組んでいる点)

- ◎ 基礎教育センターでは SA 制度の導入は教育的効果を上げている。
- ◎ 基礎教育センターでは 2023 年度より「情報ネットワークとセキュリティ」や「IT 実務

演習」といった新たな授業を開講し、学生のニーズに対応するよう努力している。

- ◎ 国語国文学科では教職共同での資料探索・レポート作成指導、図書館職員と共同の授業実施などが評価される。また国語国文学科研究室でのきめ細かい対応も効果的である。
- ◎ フランス語フランス文学科ではラーニング・コモンズとして学科研究室を開放し、フランス人 TA、大学院生 TA、プログラム・コーディネーターなどで学生サポート体制を整備していることは評価できる。
- ◎ 英語英文学科は児童英語指導者養成プログラムが充実しており、初等教育との連携も評価される。
- ◎ 児童文化学科では『開花宣言』（冊子）、『児童@白百合ちゃんねる』（動画）、『作品展示会』など、学習の成果を公表することで、学生たちの学びを活性化する仕組みが整っている。また授業内で考案されたキャラクターが調布市に採用されるなど、大学での学びと社会のつながりを明確に把握できる機会が多く設けられている。
- ◎ 発達心理学科では、アドヴァイザー制度の見直しを行い、全教員が少人数の学生グループの指導を学年持ち上がりの形で行う制度に改めたことは、個々の学生へのきめ細かい指導を可能にしている。
- ◎ 発達心理学科では公認心理士カリキュラムが完成年度を迎え、新たに履修系統図を作成した。DP との整合性を検討しながらよりよい教育課程を編成する措置を取っている。
- ◎ 発達心理学科では学科独自の授業アンケートを行い、学科単位で授業を改善する努力を行っている。
- ◎ 初等教育学科では学生の学習を活性化するため、授業外の学習時間や評価の観点を明記したシラバスを作成している。また授業アンケートの結果を精査することで、授業内容の改善に努めている。
- ◎ 全学的には、卒業時アンケートが高い回収率で実施されていること、また外部アセスメントテストの導入が図られたことは、学習成果の把握に向けての動きとして評価される。

（課題）

- ◎ 情報の「広報活動への反映」をさらに進める必要がある。
- ◎ 大学としてフランス語フランス文学の魅力の社会的・文化的アピールを開かれた形で行う必要がある。
- ◎ 児童英語指導者養成プログラムに重点が置かれていることを、大学全体の広報活動「強み」のポイントとすると良い。
- ◎ 学科内のカリキュラム編成のみではなく、学科の学生が履修する他学科の科目、特に語学、基礎教育センターのカリキュラムとの統一性、連続性を整備する必要がある。
- ◎ 初年次教育科目（パブリック・リテラシー）におけるコンテンツを調整するにあたり他学科・関連部局との連携をより密に行う必要がある。
- ◎ 外部アセスメントテストが定着するにつれ表面化してくる課題について注視する必要がある。また、アセスメントテスト活用により、どのような点がカトリックの人間観・世界観を踏まえた教育成果であるのか、具体的に示すとともに、一人ひとりの学生に

のような形で内在化しているのかについての検討が求められる。

(2) 大学院

(評価)

点検項目は異なるものの「改善すべき点がある」等の評価が多かった昨年度と比較し、自己評価、委員会評価ともに、「適切に取り組んでいる」との評価が多かった。カリキュラム及び教育方法の適切性について全学的な検討を行う事が今後の課題である。

(取り組めている点)

- ◎ 発達心理学専攻では博士課程（前期）における実習に関して、受入機関との連携強化によって年間を通して実習を可能にし、実習時間を確保しやすくしている。また、博士課程（前期）入学予定者に対し、修士論文発表会兼口述試験と構想発表会を公開したほか、入学前教育の充実、ゼミ指導方針の説明を4月に新規設定、修士論文中間発表会の時期の早期化、博士課程（後期）学生のための指導委員会の設置や定期的な研究指導会の開催等、計画的に各段階に応じた試みを工夫して導入し研究指導に当たっている。
- ◎ 児童文学専攻では、教育課程編成をより適切なものにしていくために専攻会議で検討を重ね、その結果に基づく変更を実行している。また「研究内容届」「論文執筆計画書」等を通じて、学生の研究の進捗状況を全教員が共有することによって指導体制の充実を図るとともに、指導チェック項目を記載した「研究指導計画表」を配布し、研究発表の機会を増やすなど、学生の学習及び研究を活性化する取り組みが充実している。
- ◎ 国語国文学専攻では、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーとの関係がより明確になるよう検討が行われ、ディプロマポリシーに基づき、必修科目の「修士論文」の執筆を研究の集大成として位置づけたカリキュラムが編成されている。また、国語国文学専攻、英語英文学専攻、フランス語フランス文学専攻の三専攻で設けている「オムニバスA」の受講が可能になっており、深く幅広い教養や知識を身につけることを意図した科目が提供されている。
- ◎ フランス語フランス文学専攻では、適切に教育課程を編成するための措置として、研究科目を一定の分野に偏らないように配慮しながら設置されている。また、教育課程の整合性および体系性を担保するための具体的措置として、あらゆるリサーチワークにおいて必要とされるフランス語の高度な運用能力の修得を目的とした「フランス語I～IV」が必修科目として設置されている。また授業内だけでなく、授業外においても、学生の学習を活性化し効果的に教育を行うための措置としては、各学生が自分の研究について、その内容と進捗状況を定期的に報告できる場を共有できるように、前期と後期に1回ずつ発表会が行われている。

- ◎ 英語英文学専攻では、「指導計画書」と「修士論文審査基準ルーブリック」の使用により、研究指導の客観性と成績評価の公平性を、安定的に維持することが可能となっている。
- ◎ 言語・文学専攻では教育目標、学修・研究目標を達成するため2021年度に「課程修了および学位取得スケジュール」を確立し、2022 年度からはその周知徹底を図っている。また、新カリキュラムへの移行期に生じる疑問に答える資料を作成して、学生に提供を行った。

(課題)

- ◎ 「学生の社会的及び職業的自立」に対して、言語コミュニケーション能力の育成がどのように貢献しているかを検証し、大学全体での取り組みが必要であると思われる。
- ◎ 「卒業時アンケートの分析」及び「進路データの共有と分析」について検討を行うことは、大学全体での取り組みが必要であると思われる。
- ◎ 各専攻会議において成績分布データ及び進路データに基づいてカリキュラム及び教育方法の適切性を検討し、大学院専門委員会において各専攻の検討結果を報告しあい研究科全体の課題を協議するというプロセスに沿った点検・評価を、より適切かつ有効に実施する。
- ◎ 学習の活性化の前提となる学生数の確保に関しては、専攻として可能な対策を講じているが、大学全体としても取り組む必要がある。

【基準5 学生の受け入れ】

(評価)

「入学定員及び収容定員の適切な設定と在籍学生数の管理」については、切迫した課題である。また「学生の受け入れ方針に基づく学生募集方法及び入学者選抜制度の適切な設定」は同じく課題であるため、改善が求められる。

(取り組んでいる点)

- ◎ 受け入れ方針の公表に関して、総合型選抜（帰国子女・社会人入試）の「評価の目安」を出願要項において、より丁寧な記載に努めたことは評価できる。

(課題)

- ◎ 「評価の目安」については、出願要項のみならず、さらに広く公表することが望ましい。

【基準7 学生支援】

(評価)

自己評価、委員会評価ともに、「適切に取り組んでいる」との評価が多数だった。「学生の要望に対応した学生支援の適切な実施」については「概ね取り組んでいる」との評価である

ものの、一部改善が求められる。

(取り組んでいる点)

- ◎ 多様な奨学金を提供していることや奨学金申し込みの案内などが丁寧に行われている。
- ◎ 学生相談室やキャリア支援課による個別の相談も含めて、修学上の悩みや就職活動上の悩み等について、学生が相談でき支援を受けられる体制が整っている。
- ◎ キャリア支援課を利用している学生の満足度は高く、よく利用している学生ほど就職活動への納得感も高いなどの点において意義のある取り組みとして評価できる。

(課題)

- ◎ 様々な種類の学修困難を訴える学生に対して具体的にどのような対応・支援をしている取り組みについて、アドバイザー制度以外でも可視化できるようにする必要がある。
- ◎ アドバイザー制度は体制としては有意義である一方、学生アンケート結果からアドバイザーに相談をしたことのない学生のうち、制度詳細を把握していない学生が一定数いることが明らかになった。そのためアドバイザー制度の詳細を周知すること、学生がアドバイザーに相談しやすい体制を構築することが求められる。

【基準9 社会連携・社会貢献】

(評価)

自己評価、委員会評価ともに、「適切に取り組んでいる」との評価が多数だったものの、「社会連携・社会貢献の適切性について定期的に点検を行っているか。またその結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。」の項目では、「改善すべき点がある」との評価となっている。

(取り組んでいる点)

- ◎ 社会連携・社会貢献活動については、教員・学生が主導しつつ、各学部・学科、各センター、および事務部署を含め、各組織が積極的に地域の施設等と連携した教育活動や研究活動が多岐にわたって行われていると評価できる。社会連携センター事業として実施している企画もあり、大学全体として近隣市の公的機関や民間施設と連携したプログラムを推進していることは評価できる。

(課題)

- ◎ 本学の社会連携・社会貢献活動は、複数の学科が合同で実施する等、組織横断的に実施される活動が多い。長期的には社会連携のマネジメント等、中核的な役割を担うセンターとして、社会連携センターを整備していく必要がある。

【附属施設】

■図書館

(取り組んでいる点)

- ◎ 新入生への図書館オリエンテーション、図書館と学生との接点を増やす企画の実施など、計画的かつ定期的に取り組んでいる。
- ◎ 学習支援として、ガイダンスコンテンツの作成・整備が進められたことは評価される。
(課題)
- ◎ 図書資料の充実を継続的に推進していくことが求められる。

■発達臨床センター

(取り組んでいる点)

- ◎ 地域から信頼される相談機関としての地位を固めていること。
- ◎ 大学院生の臨床力を高める実習機関として大きな役割を果たしていること。
(課題)
- ◎ 多種多様な相談機関が乱立する中、本学の発達臨床センターとして特色ある取り組みをどのように広報し、機能強化に努めていくかが課題である。

■児童文化研究センター

(取り組んでいる点)

- ◎ 留学生へのサポートは大学全体のテーマであり、日本語支援のためのチューター制度の充実が図られたことは大きな成果である。
- ◎ 定期的な講演会、研究会を開催していることは評価される。
(課題)
- ◎ 留学生拡大のための環境整備の推進が必要である。

■言語・文学研究センター

(取り組んでいる点)

- ◎ 講演会・文化講座等を4回にわたり開催し、研究活動の発信と広報に努めたことにより、フランス文学に対する学生の関心を高めることに貢献したこと。
(課題)
- ◎ 研究生への支援の充実にあたり必要な予算措置を講じること。

■キリスト教文化研究所

(取り組んでいる点)

- ◎ 教職員へのアンケート調査を実施し、教職員の「キリスト教文化研究所」への意識・考えの把握に努めたこと。
- ◎ チャペルコンサートは学内に定着した活動であり、学生及び教職員がキリスト教にふれる貴重な機会となっていることは評価される。
(課題)

- ◎ アンケート調査から明らかとなった教職員の関心・理解不足に対し、理解の裾野を広げていく必要がある。

■生涯発達研究教育センター

(取り組めている点)

- ◎ 研究会、紀要の発行を中心とした取り組みが定着し、研究活動の蓄積が図られていること。

(課題)

- ◎ 登録者の人数も一つの指標として有効であると思われるが、より活動に協力する卒業生をどのように増やしていくか。「白百合生涯発達ネット」に加入するメリットを拡充する。

【教育・研究支援センター】

■ウェルネスセンター

(取り組めている点)

- ◎ センター事務室と健康相談室、学生相談室相互の緊密な連携体制が構築されていること。

- ◎ 全学生に対する案内を前期・後期の開講前に行い、支援が必要な学生へのアウトリーチに取り組んでいること。

(課題)

- ◎ 多様な学生に対する支援体制を準備しておくことが求められている。